

手話で つながる

「聞こえない」ということ。見た目では分からないからこそ、困ることがたくさんあります。手話は耳の聞こえない人のコミュニケーション方法の1つです。今号では、その手話について特集します。

福祉課 ☎ 66-1106

手話は、ろう者（会話に手話を使う人）がコミュニケーションをとるための視覚的な言語です。声を使わず、手の動き、顔の表情、体の動きなどを使って意思を伝えます。

手話の歴史は古く、1760年にフランスで世界初のろう学校が設立され、手話による教育が始まりました。1878年には日本でもろう学校が設立され、手話が広まっていきました。本市でも、1898年に現・豊橋ろう学校の前身である「私立拾石訓唼義塾」が宝飯郡塩津村（現・拾石町）に設立されました。これは全国で3番目のろう学校でした。しかし、ヨーロッパで「口話」が推し進められるようになると、日本でも徐々に手話が禁止され、手話が再び認められるようになったのは、1990年代でした。

現在、本市には約250人の聴覚障害者がいます。そのうち、約50人が手話を使っています。聴覚障害者は「聞こえない」ことにより、困ることがたくさんあります。補聴器や人工内耳をつければ聞けると思われがちですが、それぞれの聴力によって聞こえ方はバラバラで、十分ではありません。したがって、他者とコミュニケーションがとりにくい、音声による情報が伝わらないなど、たくさんの不便があるのです。

最近では、学校で手話について学んだり、手話が題材のドラマが放送されたりして、手話に触れる機会も増えていますが、まだまだ知っている人が少ないのが現状です。みんなが生きやすい社会をつくるため、一人ひとりが知ることから始めませんか。